

終末論的Q伝承とマルコにおける終末論的説話伝承との間の神学的関係

終末論的Q伝承とマルコにおける終末論的説話伝承との間の神学的関係

—— マタイ10:19-20, ルカ12:11-12, マルコ13:11を中心にして ——

大 石 健 一

序

本稿の目的は、終末論的Q伝承とマルコにおける終末論的説話伝承との間の神学的関係を特定することにある。この課題を達成するために、第一に、我々はマタイ、マルコ、ルカから適切なテキストを選ぶ必要がある。本稿の表題において既に示されているように、マタイ、ルカ、そしてマルコ間に観察されるいわゆる「小一致点」(minor agreements)が扱われることになる。小一致点とは、互いに並行関係にあるマタイとルカのテキストのうちマルコにも並行箇所を持ち、さらにマタイとルカの両者が同様の仕方でそのマルコの箇所とは一致して異なった記述をしている部分を指す。周知の通り、マルコの終末論的説話は13章に集中しているが、13章内においてかかる小一致点として見なされる可能性が高い箇所を差し当たり以下に記す。マタ10:19-20//ルカ12:11-12//マコ13:11, マタ10:34-36//ルカ12:51-53//マコ13:12, マタ24:26//ルカ17:23//マコ13:21, マタ24:44//ルカ12:40//マコ13:35。紙面の制約上、以上の全てのテキストを包括的に扱うことは出来ない。よって本稿では、マタ10:19-20, ルカ12:11-12, マコ13:11のみに関して分析するものとした。第二に、マタ10:19-20及びルカ12:11-12における編集史的な観点に基づいた考察を経た後に、両者からQの原型を復元する必要がある。同時にマコ13:11についても、マルコが入手した伝承に遡り、これを可能な限り再構成しなければならない。そして最後に、我々はQ12:11-12⁽¹⁾とマコ13:11を比較して、

両者の関係について最終的な判断を下すことになる。

1. マタイ10：19-20, ルカ12：11-12における小一致点

小一致点がマタイ10：19aとルカ12：11において明瞭に見出される⁽²⁾。以下に示されている通り、両者は4個の逐語的一致を含む。

マタイ 10：19a	ルカ 12：11
<u>ὅταν δὲ παραδώσιν ὑμᾶς,</u>	<u>Ὅταν δὲ εἰσφέρωσιν ὑμᾶς</u>
<u>μὴ μεριμνήσητε πῶς ἢ τί λαλήσητε·</u>	ἐπὶ τὰς συναγωγὰς καὶ τὰς ἀρχὰς καὶ τὰς ἐξουσία, <u>μὴ μεριμνήσητε πῶς ἢ τί ἀπολογήσηθε</u> ἢ τί εἴπητε·
しかし彼らがあなたがたを引き渡す時 心配するな、何をどのように言うべきか。	しかし彼らがあなたがたを連れて行く時 諸会堂や役人たち、権力者たちの前で 心配するな、何をどのように言うべきか。 また何を言うべきか。

両箇所認められる特筆すべき特徴は以下の通り。

1. マタイとルカは共にマルコの καὶ ὅταν に代えて ὅταν δέ を使用している。
2. マタイとルカはマコ13：11における μὴ προμεριμνᾶτεをμὴ μεριμνήσητε に変更している。
3. πῶς ἢ τί⁽³⁾が両者によって採用されている。
4. ルカ12：12と21：15においてダブレットが観察される。両節は聖霊あるいはイエスが弟子たちの語るべき言葉を教示する宣言を扱っているものの、その記述の仕方は互いに異なっている。よってここには、マルコ以外の何らかの資料の存在が推測され得る。ルカ21：15はマルコの編集句に依存している故に、恐らくルカ12：12はQに由来する⁽⁴⁾。

これら全ての一致点をマタイとルカのマルコに対する偶然的な修正に帰すこ

終末論的Q伝承とマルコにおける終末論的説話伝承との間の神学的関係

とは極めて困難である。これらの現象は、マタ10：19aとルカ12：11がQ資料から抽出された事実を意味している。

マタ10：19bとルカ12：12に関して、多数の研究者が両節をQに由来するものと見なす。マタ10：17-22は総じて文献学的にマコ13：9-13に依存しており、マタイがマルコのテキストをここで利用していることは否定し得ない。しかしながらマタイはしばしばマルコをQと合成させる傾向があることを考慮する必要がある。次の図が示すように、マタイ、ルカ間の近似性はマタイ、マルコ間の共通点以上に注目し得る。

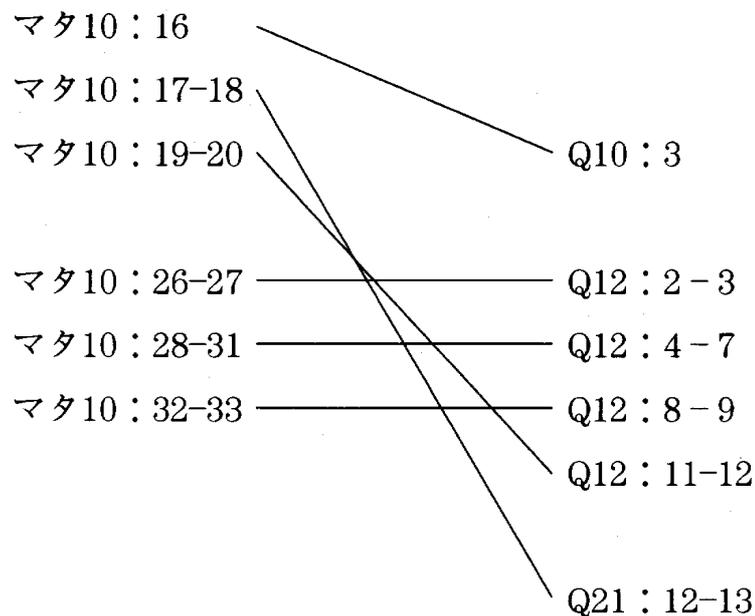
Mk 13 : 11	ἀλλ' ὁ ἐὰν δοθῇ ὑμῖν ἐν ἐκείνῃ τῇ ὥρᾳ τοῦτο λαλεῖτε
Mt 10 : 19b	δοθήσεται γὰρ ὑμῖν ἐν ἐκείνῃ τῇ ὥρᾳ τί λαλήσητε
Lk 12 : 12	τὸ γὰρ πνεῦμα διδάξει ὑμᾶς ἐν αὐτῇ τῇ ὥρᾳ ἃ δεῖ εἰπεῖν

マタイ、ルカの両者はマルコと以下の点で異なる。1. マルコにおける命令形の削除。2. ἀλλάに対するγὰρの代用。3. 〈関係代名詞 + λαλήσητεまたはδεῖ εἰπεῖν〉の組み合わせの使用。これらの点から、マタイはマコ13：11とQを利用しつつマタ10：19bを形成したとの結論に至る。

2. マタイ10：19-20の分析

言葉伝承の配列順序

Q10：3，Q12：2-9，Q12：11-12，Q21：12-13の一連の言葉伝承が、マタイ10章において集中的に集積されている（Q12：2-3 //マタ10：26-27，Q12：4-7 //マタ10：28-31，Q12：8-9 //マタ10：32-33，Q12：11-12//マタ10：19-20）。マタ10：19-20はこれらの言葉伝承の一つに相当する⁽⁵⁾。ルカにおいては分散して配置されている諸伝承は、マタイでは幾つかの伝承から成る塊あるいは群として存在する⁽⁶⁾。対するルカでは広範囲に拡散されているこれらの諸伝承は、マタイではテーマ毎にグループ化されている⁽⁷⁾。



グループ化されていたQの諸伝承が意図的にルカによって解消・分散させられたという想定以上に、マタイが分散していた諸伝承をテーマに従ってグループ化させたという可能性が高い。なぜなら、ルカは総じて元来の言葉伝承の配列を保持する傾向があるからである⁽⁸⁾。

マタイ10：16-18の分析

マタ10：16aは弟子たちの派遣に関するQの説話に由来する⁽⁹⁾。マタ10：16bはQには観察されない。蛇の賢さというモチーフはマタイ神学に適合せず、蛇（עיומים כנהשים）と鳩（כיונים）の組み合わせがミドゥラッシュ（*Midrasch Hoheslied* 2：14）に見出されるため⁽¹⁰⁾、マタイの編集的挿入よりむしろマタイ以前の付加（恐らくはマタイ版のQに由来）が好まれる。

マタ10：17-18はマコ13：9-10に相当し明らかにこれに依存しているにもかかわらず、マタイはマコ13：9-10と並行する資料を独自に持っており、マルコ自身はマルコ版のQ（ Q^{Mk} ）を所有していたとランブレヒトは主張する⁽¹¹⁾。だが、マタイがマルコのテキストをマタイ的に改変しつつ、これとQとを本箇所合成させていると想定する方が、彼の主張より遙かに支障が生じない⁽¹²⁾。

終末論的Q伝承とマルコにおける終末論的説話伝承との間の神学的関係

3. ルカ12：11-12の分析

ルカにおける結合された言葉伝承

ルカ11：33-36, 12：2-12におけるそれぞれのQ伝承はある文学的手法によって互いに結合させられており、幾つかのキーワードがこれらの言葉伝承を集合的に束ねている。ルカ11：35のτὸ φῶς - τὸ ἐν σοὶ σκότοςは12：3のἐν τῇ σκοτίᾳ - ἐν τῷ φωτίに対応し、ルカ11：34, 36のσῶμαは12：4において再度残響している。ツェラーによって指摘されているように⁽¹³⁾、ルカ11：33-36は現在、ファリサイ派らに対するイエスの批判を扱う11：37-52の直前に位置しているが、元来は12：2-22の直前に配置されていたであろうことは推測に難くない⁽¹⁴⁾。ルカ12：8はὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου（「人の子」）を含み、伝承史的に12：8-9と12：11-12から独立しているルカ12：10は、12：8からὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπουを継承しつつτὸ ἅγιον πνεῦμα（「聖霊」）を扱う。続く12：11-12はこの「聖霊」を引き継いで、弟子たちの迫害のモチーフを導入する。

他の文書における結合された言葉伝承

Q11：33と共通する伝承がマコ4：21に見出され、Q12：2はマコ4：22に認められる。このようにマルコにおいては、これらの言葉伝承が逆順にされたうえで配列されている⁽¹⁵⁾。同様にQ11：33とQ12：2との組み合わせはトマス福音書にも存在することから、幾つかの諸伝承をキーワードによって互いに結合させる文学的手法は、Qやトマス福音書といった“言葉集”という文学的ジャンルの一つの特徴を反映していると考えることが出来る⁽¹⁶⁾。

Qの形成段階におけるQ12：8-12の編集

Q12：8-12の結合された伝承間には内容的な統一が保たれておらず、よってここにルカの編集を仮定することは適切ではない。フィッツマイヤーはこれら伝承の集積と結合作業をルカに帰すが、キーワードにより伝承を束ねる作業はルカ的な洗練された編集とは別種のものである。例えば、12：13-21の編集的構成においてルカは内容的に統一された言葉伝承の一群を案出しており、ルカは編集句を適宜導入することにより（13節a, 15節a）、一定のテーマに従っ

て彼の特殊資料 (Sonderguter) を統合している⁽¹⁷⁾。キーワードによってもたらされているQ12:8-12の伝承間の連続性はQの形成段階にて施された編集作業に帰せられ、従ってマタイ的思考の下に改変されたマタ10:1-25に比して、ルカ12:8-12はQ伝承の元来の順序をより保持しているとの結論に到達する。

4. Q 12:11-12の再構成

マタ10:19とルカ12:11-12の分析を終え、我々は両者のテキストからQ伝承の原型を再構成する作業に移る。先ずὅταν δέについて、マタイとルカの双方により使用されていることから、これをQに由来するものと見なすことに問題はない⁽¹⁸⁾。

παραδῶσιν ὑμᾶς か、または **εἰσφέρωσιν ὑμᾶς** か

次に、マタイ的παραδῶσιν (「引き渡す」) とルカ的εἰσφέρωσιν (「連れて行く」) のどちらがQのオリジナルであるかを識別しなければならない。εἰσφέρωは他の新約文書に比してルカにおいてより使用される傾向がある (マタ1回, ルカ4回, 使1回, 一テモ1回, ヘブ1回)。仮にこの語をルカ的語彙に属すると考えるならば、マタイの方がQのオリジナルとして選ばれることになる。だがマタイが彼のテキストをマルコのそれに適合させ、マコ13:11aの分詞 παραδιδόντεςを採用しつつ、オリジナルのεἰσφέρωσινをπαραδῶσινに改変した可能性もある。マタイは同じ動詞を10:17bにおいても用いている。この箇所の παραδώσουσινは明らかにマコ13:9bの同語に依存している。故に、マコ13:9b, 13:11aがマタイの語法に影響を与えていると推測され得る。

ἐπὶ τὰς συναγωγὰς か、 **εἰς τὰς συναγωγὰς** か、またはどちらでもないか

ルカ12:11aがἐπὶ τὰς συναγωγὰς (「会堂に」) を保持している一方、マタ10:19aはこれを欠く。先の推定上のQテキストであるὅταν δέ εἰσφέρωσιν ὑμᾶς (「彼らがあなたがたを連れて行く時」) は目的語なしには存立し得ず、場所への言及が不可欠である⁽¹⁹⁾。加えて、2.において議論された通りマタイはマタ10:17-18においてマコ13:9-10を踏襲している。マタイはこの箇所において既に弟子たちの迫害に触れており、彼がマタ10:19aにて再度このテーマに言

終末論的Q伝承とマルコにおける終末論的説話伝承との間の神学的関係

及する必要はない。そのためにマタ10：19aでは会堂に関する言及が削除されたと見なすことが可能である。すなわち，ἐπὶ τὰς συναγωγὰςはQに含まれていたと推定される⁽²⁰⁾。

καὶ τὰς ἀρχὰς καὶ τὰς ἐξουσίαςはオリジナルか，または付加か

ルカだけが異邦人的な権力機構を指すκαὶ τὰς ἀρχὰς καὶ τὰς ἐξουσίας（「～と支配者と権力者」）を補っている。これによりルカはユダヤ的な権威である会堂との対照をもたらしている。ἀρχὴとἐξουσίαとの組み合わせはルカ20：20だけでなく一コリ15：24，エフェ1：21，3：10，6：12，コロ1：16，2：10，テト3：1にも看取される⁽²¹⁾。さらにマコ12：13に対して二次的であるルカ20：20においてルカは，τινας τῶν Φαρισαίων καὶ τῶν Ἡρωδιανῶν（「ファリサイ派とヘロデ派の人々」）に代えてτῇ ἀρχῇ καὶ τῇ ἐξουσίᾳ（「支配者と権力者」）と記している。ἐξουσίαは恐らくルカ的である⁽²²⁾。この組み合わせがルカの編集であると断定出来ないものの，この二次的な付加がルカかQに由来することは確かである。

μὴ μεριμνήσητε

「心配するな」という禁止命令はマタイとルカの両方で保持されている。マルコのμὴ προμεριμνᾶτε（「前もって心配するな」）を両者が偶然に一致して改変したとも考え得るが，μεριμνάωは頻繁にQで使用されている故に（Q12：11 [マタ10：19]；Q12：22 [マタ6：25]；Q12：25 [マタ6：27]；Q12：29 [マタ6：31]；マタ6：31 [ルカ12：29]⁽²³⁾；マタ6：34⁽²⁴⁾，この禁止命令もQに属すると見なすべきである。

πῶς ἢ τί

ルカのπῶς ἢ τί（「どのように，また何を」）には本文批評的問題が伴っている。幾つかの写本（D it Sy^{C.P}）と教父による引用（Cl Or）はπῶς，r¹ Sy^Sはτίと読んでいる。メツガーはこれらの写本家がπῶς ἢ τίをマタイのテキストに同化させたと指摘する⁽²⁵⁾。だが，D it Sy^{C.P}の写本家がἢ τίを削除することにより冗長な言い回しを修正した可能性もある⁽²⁶⁾。この極めて異例な表現は新約とLXXを含めても2回，すなわちマタ10：19とルカ12：11でしか現れず，マタ

イとルカがそれぞれ独自にこの表現をもって修正することは全く考えられない。このようなわけで、πὼς ἢ τίは恐らくQに属する。

ἀπολογήσθε ἢ τί

ἀπολογέομαι (「弁明する」) はルカ文書にのみ観察されるため、容易にルカ的であると決定される⁽²⁷⁾。ルカはこれをマコ13:11の編集時に使用している。この動詞はまた使徒言行録において法廷でのパウロの弁明を指して集中的に用いられており (Cf. 24:10; 25:8; 26:1, 2, 24), パウロは権威を前にしての典型的証言者として描写されている。すなわち、ルカは元来のQ伝承に既に含まれていた聖霊論的アスペクトに、証言と聖霊論との相関関係というルカ的思考を盛り込んでいる⁽²⁸⁾。

マタイのλαλήσητεか ルカのεἶπητεか

マタイはマルコのλαλήσητεに一致するが、ルカでは代わりにεἶπητεが来る。ルカは他の共観福音書家と比べ比較的λαλέωを好む傾向にある⁽²⁹⁾。このことは、ルカがこの語の使用をルカと使徒言行録で避けてはいないことを意味する⁽³⁰⁾。もしλαλήσητεをオリジナルと仮定するならば、何故ルカがこの語をεἶπητεに変更しなければならなかった理由を説明出来ない。恐らくルカはオリジナルのεἶπητεを採用し、マタイはマルコのλαλήσητεに従ったのだろう。こうしたマタイの変更作業はQとマルコを合成させる彼の傾向と一致する。

マタイのδοθήσεται γὰρ ὑμῖνか、ルカのτὸ γὰρ ἅγιον πνεῦμα διδάξει ὑμᾶςか

既に述べたように、マタイはマタ10:16-23と10:17-22においてマルコとQを融合させ、マタイのスタイルは一般にマルコのそれに依存する。この傾向は特にマタ10:19-20に現れており、παραδώσινとλαλήσητε (19節a) のマルコのテキストへの同化、神的受動態 (19節β δοθήσεται) の使用、そして20節でのマコ13:11の全面的導入が認められる。

マタイはマコ13:11aの神的受動態を受容している。行為の主体が聖霊であることを宣言するマコ13:11cをマタイは忠実に既に再録しているため⁽³¹⁾、彼はマタ10:19bで改めて聖霊に言及する必要がない。こうした事情から、彼は恐らくルカ12:12に保持されているQ伝承の代わりにそのマルコのテキストを

終末論的Q伝承とマルコにおける終末論的説話伝承との間の神学的関係

利用したのだろう。

付言すれば、20-21節の編集の際、マタイはマコ13:11cのτὸ πνεῦμα τὸ ἅγιονをτὸ πνεῦμα τοῦ πατρὸς ὑμῶν（「あなたがたの父の霊」）に書き換えている。この表現は新約ではユニークであり⁽³²⁾、明瞭に「父」という呼称を好むマタイの特徴を表している⁽³³⁾。

マタイのἐν ἐκείνῃ τῇ ὥρᾳか、ルカのἐν αὐτῇ τῇ ὥρᾳか

マタイのἐν ἐκείνῃ τῇ ὥρᾳ（「その時」）は逐語的にマコ13:11bと一致するが、ルカのἐν αὐτῇ τῇ ὥρᾳ（「まさにその時」）はこれらとは異なっている。このルカの章句はルカ的表現の一つである可能性がある。この表現はルカで4回用いられ⁽³⁴⁾、他の文書ではLXXダニ5:5以外には見出されない。予期的に時を指示する代名詞の使用は、アラム語の影響を想定し得る（Cf. ダニ3:6；ܩܪܝܢܘܨܩܩܐ）。ἐν ἐκείνῃ τῇ ὥρᾳはマタイにしばしば現れる時間を点的に指す表現の一つであり、新約全体中8回の出現のうち3回がマタイで観察される⁽³⁵⁾。マタイとルカのどちらがオリジナルであるか判断材料の不足のために決定は困難だが、マタイのἐν ἐκείνῃ τῇ ὥρᾳの新約における使用回数の多さからこれが一般的な言い回しであったと考えられるので、マタイを支持すべきである。

マタイのτί λαλήσητεとルカのὃ δὲ εἰπεῖν

ルカの方に含まれるδεῖは新約で102回の使用を数え、ルカはこれを自身の福音書で19回⁽³⁶⁾、言行録で25回用いる。彼はこの語を恐らく七十人訳聖書から採っており、この推測は彼のLXXに対する同化という特徴と符合する⁽³⁷⁾。ルカ的なこちらの選択肢を避け、マタイのτί λαλήσητεをオリジナルとして選択すべきである。

ただし、既に述べたようにQとマルコを合成させるマタイの傾向を考慮する必要がある。実際マタ10:19aにおいてεἶπητεはマルコのλαλήσητεに置換されている。よって、マタイのτί λαλήσητεに修正を加えたτί εἶπητεがオリジナルとして確定する。

Q12:11-12のQにおける位置

この問題に関して、Q12:10の直後かつQ12:22bの手前、すなわちルカの

配列と⁽³⁸⁾、Q10：3（マタ10：10）の後かつQ 6：40（マタ10：24）の手前，すなわちマタイの配列⁽³⁹⁾という二つの可能性が存在する。既述の通りこの箇所ではルカは元々の配列を保持しているため，ルカの配列を優先し，Q12：11-12の位置を前者のように定める。

Q12：11-12の元来のテキスト

以上の議論の結果，以下にQ12：11-12の推定上のオリジナルテキストを提示する。

¹¹ὅταν δὲ εἰσφέρωσιν (παραδώσιν) ὑμᾶς εἰς (ἐπὶ) τὰς συναγωγὰς, μὴ μεριμνήσητε πῶς ἢ τί εἴπητε (λαλήσητε). ¹²τὸ γὰρ ἅγιον πνεῦμα διδάξει ὑμᾶς ἐν ἐκείνῃ (αὐτῇ) τῇ ὥρᾳ τί εἴπητε.

5. マルコ13：9-11の分析

マルコ13：9-13の構造

後に言及する通り，マコ13：9-13はマルコの編集以前の段階で既に集められていたであろうイエスの説話群によって構成されている⁽⁴⁰⁾。様々な言葉伝承によって組成されているこの段落は，一つの統一的なまとまりとしては成り立っていない⁽⁴¹⁾。換言すれば，この段落では言葉伝承群が断片化している様子が看取される。ただし，これらの言葉伝承が迫害，福音の宣言，そして信仰の堅持というテーマの許に二次的に統合されようとした形跡はある⁽⁴²⁾。さらに，13：9-13におけるそれぞれの言葉伝承は，先のルカ11：33-36と12：2-12の如く，9，11，12節のπαραδίδομι（「引き渡す」）⁽⁴³⁾と9節のἕνεκεν ἐμοῦ（「私のために」）と13節aのδιὰ τὸ ὄνομά μου（「私の名の故に」）という二つの表現により互いに結合させられている。この文学的手法により，12-13節aは9節と11節に接続されている。9節と11節はQ12：11-12と並行関係にあることは既に記したが，この事実は13：9-13の最終的な構成以前から既に両節が存在し，流布・循環していたことを指す⁽⁴⁴⁾。こうした素材を入手したマルコは，最後に10節を一群の伝承によって構成された9-13節aに挿入した。13節bは統語論的

終末論的Q伝承とマルコにおける終末論的説話伝承との間の神学的関係

見地から他とは独立した言葉伝承と分類される⁽⁴⁵⁾。

言葉伝承に由来するマコ13:9と13:11

13:9-13は勧告的命令のβλέπετε（「気を付けなさい」）によって導入され⁽⁴⁶⁾、イエスの終末論的説話の冒頭（5節b）と、9-13節の始め、14-23節の結び、そして32-37節の冒頭に位置する⁽⁴⁷⁾。この語が終末論的説話の導入的機能を負いつつ、説話中の構造的に重要な箇所配置されていることは明らかであり、極めて編集的である⁽⁴⁸⁾。

εἰς μαρτύριον αὐτοῖς（「彼らへの証のために」）は1:44と6:11に現れるが、どちらもマコ13:9とは異なる意味で用いられている。13:9のそれは異邦人為政者らに対する福音の証の意味を持ち、後続の章句によってそれが世界的視野にまで拡大される。ある研究者らは、この章句と10節の間にテーマ的連続性を指摘し、これをマルコにより二次的に付加されたものと結論付ける⁽⁴⁹⁾。9節における権威者の前での証というテーマは、より鮮明に10節において展開されている。以下でその根拠が述べられるように、10節が編集句である可能性は極めて高い。元来、「彼らへの証のために」という章句は福音の世界的宣教を暗示してはおらず、マルコはこれが当初から持っていた苦難の中での証言という関心を展開させたのだろう。そして9節と11節の間に10節を案出・挿入したのかも知れない。

11節aと11節bはそれらが小一致点に該当するという理由から、総じて伝承句と見なし得る。さらに我々はこれらの節にある一つの特徴、すなわち非セム語的性質を特定出来る。名詞節、関係詞節、または分詞が先行しそれらが文法的にそのセンテンスから独立している状態を指す*casus pendens*がここに看取される⁽⁵⁰⁾。

13:11 ὁ ἐὰν δοθῆ ὑμῖν ἐν ἐκείνῃ τῇ ὥρᾳ τοῦτο λαλεῖτε

「その時与えられることは何であれ、これを語れ」

この特徴は、本節が二次的にギリシア語的な編集を加えられたことを意味す

る可能性がある⁽⁵¹⁾。この*casus pendens*は何らマルコの的な関心を見せてはいない。元々の伝承がある段階でギリシア語的影響を受けて修正された蓋然性の方が高いと思われる。

11節cに関して (οὐ γὰρ ἐστε ὑμεῖς οἱ λαλοῦντες ἀλλὰ τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον 「話すのはあなたがたではなく聖霊である」), マルコの語法に分類され得る補足説明的なγάρが使われているが⁽⁵²⁾, その理由のみから11節cを単純にマルコの挿入と主張することは出来ない。第一に, 11節cはそれがマルコにより生成されたと特徴付けるに足る要素が少ない。説明的なγάρは必ずしもマルコの的であるとは限らない。第二に, 11節bが11節cなしに独立して存在することは不可能である。11節においてマルコの伝承が少しも聖霊論的アスペクトを当初から持たなかったと仮定することには困難が伴う。第三に, 聖霊を指してのτὸ πνεῦμαはマルコの伝承句で5回出現する (1:10, 1:12, 3:29, 12:36, 13:11)⁽⁵³⁾。この現象は, 11節cが伝承であることを支持するものである。

マルコの挿入としてのマルコ13:10

研究者の大多数がマコ13:10を二次的と見なす⁽⁵⁴⁾。以下の根拠から, 10節がマルコの手により9節と11節の間に挿入されたとの判断が導かれる。1. 9節は10節なしに円滑に11節に接続する。2. 10節の主要な関心 (福音の世界的宣教) は9節と11節に対してテーマ的な整合性を持たない。3. 独立用法的にτὸ εὐαγγέλιονを用いるのはマルコの典型的スタイルである。8:35と10:29では, マルコはκαὶ τοῦ εὐαγγελίου (「そして福音と」) とἐνεκεν τοῦ εὐαγγελίου (「福音のために」) をἐνεκεν ἐμοῦ (「私のために」) の後に補足している。さらに, マルコの用語であるκηρύσσω (「宣教する」) とτὸ εὐαγγέλιον という組み合わせが13:10と14:9に確認されることは特筆に値する。

ある研究者たちは10節を編集的挿入句と判断しながらもこれを既にマルコ以前に存在していた資料から抽出したと指摘する⁽⁵⁵⁾。実際, πάντα τὰ ἔθνη (「全ての民」) は旧約やLXXからの引用によく現れる⁽⁵⁶⁾。また, 先の「宣教する」という動詞は初代教会の一般的用語の一つである。差し当たって言語上, 特にマルコの的なものはこの節には含まれない。だが, 文体と語法の視点から検討す

終末論的Q伝承とマルコにおける終末論的説話伝承との間の神学的関係

の必要があり、上記の文体的考察を考慮すれば、マルコは初代教会の用語を利用しつつ10節を案出したという推測が引き出される。

6. マルコ13:11とQ12:11との比較

既に述べてきた通り、マコ13:11はそれがQ12:11-12と小一致点の関係にあることと伝承的性格を持つという事情から、これをマルコに帰すことは不可能である。従って、13:11はある種の言葉伝承に由来することになる。次に、伝承段階のマコ13:11と復元された推定上のQ12:11の原形とを比較しよう。

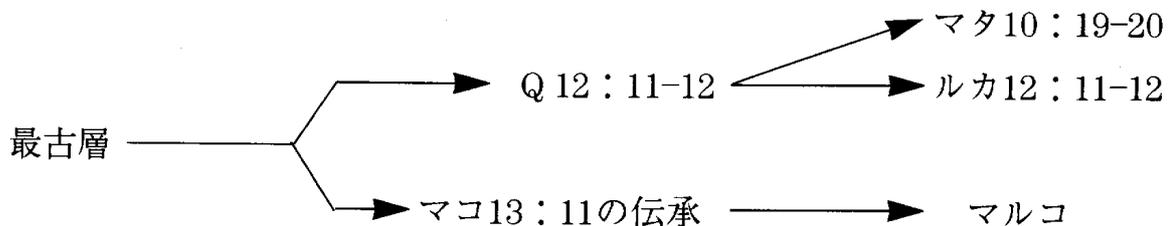
¹¹ ακαὶ ὅταν ἄγωσιν ὑμᾶς παραδιδόντες, μὴ προμεριμνᾶτε τί λαλήσητε, ἀλλ' ὃ ἐὰν δοθῇ ὑμῖν ἐν ἐκείνῃ τῇ ὥρᾳ τοῦτο λαλεῖτε·	→ 修正? ↓ ギリシア語化	¹¹ ὅταν δὲ εἰσφέρωσιν (παραδώσιν) ὑμᾶς εἰς (ἐπὶ) τὰς συναγωγὰς, μὴ μεριμνήσητε πῶς ἢ τί εἶπητε· <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;"> ¹²τὸ γὰρ ἅγιον πνεῦμα διδάξει ὑμᾶς </div> ἐν ἐκείνῃ (αὐτῇ) τῇ ὥρᾳ τί εἶπητε.
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;"> ^{11b}οὐ γὰρ ἐστε ὑμεῖς οἱ λαλοῦντες ἀλλὰ τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον. </div>		

両者の間には逐語的一致が看取される (ὅταν; ὑμᾶς; μὴ; τί; ἐν ἐκείνῃ τῇ ὥρᾳ)。半逐語的一致も見出される (προμεριμνᾶτε//μεριμνήσητε; ὑμῖν//ὑμᾶς)。マコ13:11のμὴ προμεριμνᾶτε (「前もって心配するな」) はその特殊性から、マルコの言葉伝承とQとがそれぞれ分離した後にQ伝承の側のみ一般的表現のμὴ μεριμνήσητε (「心配するな」) に修正された可能性が高い。一方、稀な表現であるπῶς ἢ τίは、マルコの伝承が循環している間により一般的な言い回しであるτί λαλήσητεに変更されたと思われる。

マコ13:11bには、Q12:12に共通する聖霊論的概念が表出している。既に見た如く、ギリシア語的な要素 (*casus pendens*) がここに認められる。加え

てマコ13：11bはQ12：12と比して、より説明的な言い方に修正されているように見える。総合すれば、マコ13：11bは二次的な伝承史的発展を遂げたものと見なし得る。同様に、マコ13：9bで先行して言及されたため13：11aでは削除されているQ12：11のεἰς (ἐπὶ) τὰς συναγωγὰς (「会堂へ」) は、マコ13：9bの εἰς συνέδρια καὶ εἰς συναγωγὰς (「地方法院と会堂へ」) のソースであると考えられる。

マコ13：11とQ12：11-12の相関関係に関して、両者はそれぞれ異なったより古い語法を持つ故に、一方が他方に対して全面的に古いと主張することは出来ない。この事実はまた、一方が他方に対し文献学的に一方的な形で依存しているという見解を完全に否定するものである。すなわち、両伝承は互いに文献学的に独立しており、ランブレヒトが展開するようなマルコのQへの依存説は適当ではないことが明らかになる。恐らく両伝承は共に同じ最古層に属しており、そこから分離してそれぞれ独立的に循環を開始し、そしてそれぞれは独自の伝承史的発展を遂げた。



注目に値することは、Q12：8がマコ13：9のεἰς μαρτύριον αὐτοῖςにおいて残響しているという点である。さらに、Q12：11のεἰς (ἐπὶ) τὰς συναγωγὰςはマコ13：9bに反映されており、Q12：12の聖霊論的概念はマコ13：11bにも観察される。これらの事実は、マコ13：9-11とQ12：8-12の言葉伝承群は共通の言葉伝承をかつて共有していたのであり、後にそれぞれ分離し独自の発展を遂げたことを意味する(下図参照⁽⁵⁷⁾)。

終末論的Q伝承とマルコにおける終末論的説話伝承との間の神学的関係

マコ13：9-11

^{9a}Βλέπετε δὲ ὑμεῖς ἑαυτοὺς· ^{9b}παραδώσουσιν ὑμᾶς

εἰς συνέδρια καὶ εἰς συναγωγὰς δαρήσεσθε
καὶ ἐπὶ ἡγεμόνων καὶ βασιλέων σταθήσεσθε
ἕνεκεν ἐμοῦ

εἰς μαρτύριον αὐτοῖς.

¹⁰καὶ εἰς πάντα τὰ ἔθνη
πρῶτον δεῖ κηρυχθῆναι τὸ εὐαγγέλιον.

^{11a}καὶ ὅταν ἄγωσιν ὑμᾶς παραδιδόντες,

μὴ προμεριμνᾶτε

τί λαλήσητε,

ἀλλ' ὃ ἐὰν δοθῇ ὑμῖν

ἐν ἐκείνῃ τῇ ὥρᾳ

τοῦτο λαλεῖτε·

^{11b}οὐ γὰρ ἐστε ὑμεῖς οἱ λαλοῦντες
ἀλλὰ τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον.

Q 12 : 8, 11-12

⁸πᾶς ὃς ἂν ὁμολογήσῃ ἐν ἐμοὶ ἔμπροσθεν τῶν
ἀνθρώπων, καὶ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου
ὁμολογήσῃ ἐν αὐτῷ ἔμπροσθεν τῶν ἀγγέλων
τοῦ θεοῦ·

¹¹ὅταν δὲ εἰσφέρωσιν (παραδώσιν) ὑμᾶς
εἰς (ἐπὶ) τὰς συναγωγὰς,

μὴ μεριμνήσητε

πῶς ἢ τί εἴπητε·

¹²τὸ γὰρ ἅγιον πνεῦμα διδάξει ὑμᾶς
ἐν ἐκείνῃ (αὐτῇ) τῇ ὥρᾳ
τί εἴπητε.

残響

拡大

7. 結論

Q12：8 は終末論的である。だがQ12：11-12は弟子たちの迫害と聖霊による教示というテーマに集中している。終末論的法⁽⁵⁸⁾が断片的にQ11：33-36とQ12：2-12で宣言されているが、両者のQ伝承はキーワードによって束ねられているのみ故、これらを組織的な終末論的議論とは呼び難い。両セクションの一連の言葉伝承は伝承“群”以上のものではない。

マコ13：11は何ら終末論的要素を持たない。さらにマコ13：9-11は集中的に試練と迫害のモチーフを扱っているように見える。だが一方で、マコ13：7-8と13：12-13は黙示文学的である。マコ13：9-11を13：7-8と13：12-

13によって構成されている黙示文学的文脈に統合する作業は、恐らくマルコの編集ではなく伝承史的な二次的發展に帰し得る。元来、迫害伝承そのものは殆ど黙示文学的ではなかった。しかしマルコの諸伝承の發展段階において、迫害伝承は13：7-8と13：12-13とに接続され、黙示文学的文脈へと統合された。その黙示文学的諸伝承群をマルコ13章という終末論的な章に組み込んだ人物がマルコである。彼は世界宣教の視野を持つ10節を、εἰς μαρτύριον αὐτοῖς（9節）に保持されていた権威者の前での証というモチーフから着想を得ることにより、二次的に組み込んだ。マタイとルカは、マルコ13章とQとを所持しており、それぞれ独自の仕方によって終末論的迫害のモチーフをマタイ24章とルカ21章で展開している。その限り、マルコは迫害伝承と終末論を結合させたパイオニアと言っても過言ではない。

(おおいし けんいち)

[注]

- (1) Q12：11-12はルカ12：11-12を指す。以下同様。
- (2) 両箇所がQに由来することについて、大多数の学者間で意見が一致。Cf. Wiefel, W., *Das Evangelium nach Matthaus* (THKNT 1; Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 1998), p. 196. Marshall, I. H., *The Gospel of Luke: A Commentary on the Greek Text* (NIGTC; Exeter: Paternoster, 1978), p. 519.
- (3) πῶς ἢ τίの本文批評的問題については、4. Q12:11-12の再構成を参照。
- (4) Fitzmyer, J. A., *The Gospel According to Luke X-XXIV: Introduction, Translation, and Notes* (AB 28A; New York: Doubleday, 1985), p. 1340.
- (5) Cf. Wiefel, *Matthaus*, p. 197.
- (6) Zeller, *Kommentar zur Logienquelle*, pp. 15-16.
- (7) 次の図が示す通り、マタイにおいて二群に集合化された言葉諸伝承は、基本的にルカと同じ順序で配列されている（マタ10：24-25//ルカ6：40；マタ10:26-33//ルカ12：2-9；マタ10：34-36//ルカ12：51-53；マタ10：37-38//ルカ14：26-27；マタ10：39//ルカ17：33）。Cf. Kloppenborg, J. S., *The Excavating Q: The History and Setting of the sayings Gospel* (Minneapolis: Fortress, 2000), pp. 58-60; 87-91.
- (8) Kloppenborg, *The formation of Q*, pp. 69, 78. Steinhauser, M. G., Kloppenborg,

終末論的Q伝承とマルコにおける終末論的説話伝承との間の神学的関係

- J. S., et al. *Q-Thomas Reader* (California: Polebridge, 1990), p. 23.
- (9) Luz, U., *Matthew 8-20* (Hermeneia; Minneapolis: Fortress, 2001), p. 84.
- (10) Cf. Strack, H. L. and Billerbeck, P., *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch* (vols. 1-5; Munich, 1922), 1:574-575. Cf. Wiefel, *Matthaus*, p. 196.
- (11) Lambrecht, *Die Redaktion*, pp. 119-120. Cf. Lambrecht, J., “Die Logia-Quellen von Markus 13,” *Bib* 47 (1966), pp. 322, 337.
- (12) Beasley-Murray, G. R., *Jesus and the Last Days: The Interpretation of the Olivet Discourse* (Peabody: Hendrickson, 1993), pp. 398-400.
- (13) Zeller, a.a.O., S. 72-73.
- (14) Lk 12:1 は12:2 以降を準備する編集的節である。
- (15) Q伝承の一部が僅かながらマルコにも流入している事実は否定出来ない。だがマルコがQの大部を知っていたと仮定することには依然として困難が伴う。
- (16) Qの文学的ジャンルに関する議論については、Kloppenborg, *The Formation of Q*, pp. 1-40 を参照。クロッペンボルグはQの文学的ジャンルに関する研究史を概説し、Qはイエスの言葉伝承の単なる堆積物ではなく、Qの起源は知恵的格言の言葉のコレクションのようなものであると断定する。さらに彼は、Qの核をQの編集的形成的過程における第一層としたうえで、第二層に相当する様々な預言者的・黙示文学的言葉群がこの第一層に加えられたと推測する。Cf. Steinhauser, Kloppenborg, et al., *Q-Thomas Reader*, pp. 13-22.
- (17) Fitzmyer, *Luke x-xxiv*, p. 962.
- (18) マコ13:11aのκαίをマタイとルカは採用していない。Cf. Lambrecht, *Die Redaktion*, p. 116.
- (19) Fitzmyer, *Luke x-xxiv*, p. 966.
- (20) Ibid.
- (21) Ernst, J., *Das Evangelium nach Lukas* (RNT; Regensburg: Friedrich Pustet, 1977), p. 395.
- (22) 同様にLambrecht, *Die Redaktion*, p. 117. マタ10回; マコ10回; ルカ16回; 使7回。
- (23) ルカ12:29ではμὴ μετεωρίζεσθεがμὴ μεριμνήσητεの代用とされている。
- (24) μεριμνάωはマタイとルカで13回使用されている。ルカ10:41はルカの特異資料に由来し、ルカ12:26はルカの編集に属する。
- (25) Metzger, B. M., *A Textual Commentary on The Greek New Testament* (New

- York: United Bible Societies, 19942), p. 159f. グルトマンは写本同士の合成の可能性を指摘。Grundmann, W., *Das Evangelium nach Lukas* (THKNT III; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1961), p. 255.
- (26) Marshall, *Luke*, p. 520.
- (27) ルカ 2 回, 使 6 回。Lambrecht, *Die Redaktion*, p. 117. Marshall, *Luke*, p. 520.
- (28) ヴィーフエルはルカ 12:11-12 と使 4:5-22 との関連性を示唆。Wiefel, W., *Das Evangelium nach Lukas* (THKNT III; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1988), p. 235.
- (29) マタ 26 回, マコ 21 回, ルカ 31 回, 使 60 回。
- (30) Lambrecht, *Die Redaktion*, p. 118.
- (31) Hagner, *Matthew* 14-28, p. 277.
- (32) Cf. Bonnard, P., *L'Évangile selon saint Matthieu* (CNT I; Neuchâtel: Delachaux et Niestle, 1963), p. 148.
- (33) マタ 20 回, マコ 1 回, ルカ 3 回。Cf. Hagner, *Matthew* 1-13, p. 277.
- (34) ルカ 10:21; 12:12; 13:21; 20:19. Cf. 2:38 (αὐτῇ τῇ ὥρᾳ).
- (35) マタ 10:19; 18:1; 26:55. Cf. 8:13 (ἐν τῇ ὥρᾳ ἐκείνῃ).
- (36) ルカ福音書にてルカはこれをマルコから 2 回, Q から 1 回引用している。つまり彼は残りの 16 回を彼単独で使用している計算になる。
- (37) δεῖは神の救済の出来事との関連でしばしばルカ文書に現れ, キリストによって実現される一連の救いの出来事は δεῖ を通じて神の計画へと統合される。Fascher, E., "Theologische Beobachtung zu dei," ZNW 45 (1954).
- (38) Lk 12:13-21 の大部分はルカの特権資料に由来する。
- (39) Cf. Robinson, J. M., Hoffman, P., and Kloppenborg, J. S., eds., *The Critical Edition of Q: Synopsis including the Gospels of Matthew and Luke, Mark and Thomas with English, German, and French Translations of Q and Thomas* (Minneapolis: Fortress/Leuven: Peeters, 2000), p. 312.
- (40) Brandenburger, E., *Markus 13 und die Apokalyptik* (Forschungen zur Religion und Literatur des Alten und Neuen Testaments; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984), p. 41.
- (41) Gundry, R. H., *Mark: A Commentary on His Apology for the Cross* (Grand Rapids: Eerdmans, 1993), p. 764.
- (42) France, R. T., *The Gospel of Mark: A Commentary on the Greek Text* (NIGTC; Grand Rapids: Eerdmans, 2002), p. 514.

終末論的Q伝承とマルコにおける終末論的説話伝承との間の神学的関係

- (43) Cf. Pesch, R., *Naherwartungen: Tradition und Redaktion in Mk 13* (KBANT; Dusseldorf: Patmos, 1968), pp. 125-127.
- (44) 同様に, Beasley-Murray, G. R., "Second Thoughts on the Composition of Mark 13," NTS 29 (1983), p. 416.
- (45) Ibid.
- (46) ルカはこれと同等のものを持たない一方, マタイはπροσέχετε (「気を付けよ」) で代用している。
- (47) Brandenburger, E., *Markus 13 und die Apokalyptik* (Forschungen zur Religion und Literatur des Alten und Neuen Testaments; Gottingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984), pp. 147-161.
- (48) Pesch, *Naherwartungen*, p. 128. Lambrecht, *Die Redaktion*, p. 120. Brandenburger, *Markus 13*, pp. 81, 151-152. Cf. Peabody, D. B., *Mark as Composer* (New Gospel Studies 1; Macon: Mercer UP, 1987), pp. 33, 75.
- (49) Beasley-Murray, *The Last Days*, p. 403. Pesch, *Naherwartungen*, p. 128. Cf. Pesch, R., *Das Markusevangelium* (HTKNT; II/2, Freiburg: Herder, 1977), pp. 282-289.
- (50) Maloney, E. C., *Semitic Interference in Marcan Syntax* (SBL Dissertation Series 51; Chico: Scholars, 1981), pp. 86-88, 247.
- (51) Gundry, *Mark*, p. 740.
- (52) Pryke, E. J., *Redactional Style in the Marcan Gospel* (SNTSMS 33; Cambridge: Cambridge University Press, 1978), pp. 114, 126ff.
- (53) τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον (3:29) のように, マルコの伝承は定冠詞が二重に使われている形を好む。
- (54) Pesch, *Das Markusevangelium*, pp. 282-285. Gnllka, J., *Das Evangelium nach Markus* (EKK II/2; Zurich: Benziger Verlag/Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1994), p. 189. Beasley-Murray, *The Last Days*, p. 398. France, *Mark*, pp. 515f.
- (55) Beasley-Murray, *The Last Days*, p. 403.
- (56) LXXでは92回使用される。
- (57) 太字はマルコの編集, 矢印付きの実線は両テキストの直接的な一致, そして波線は間接的一致を示す。
- (58) Zeller, *Kommentar zur Logienquelle*, p. 72.

日本伝道協議会

回／年	主 題	主題講演 (講演者)	発題講演 (発題者)
第1回 1990年	伝道…新たな展開を目指して 主題のもとに展開されるべき課題 (1)福音理解, 伝道理解について (2)伝道者, 教職理解について (3)教団問題と, あるべき諸教会の協力体制		加藤常昭 石黒悦雄 竹前 昇
第2回 1991年	現代における伝道者	近藤勝彦 加藤常昭	
第3回 1992年	日本基督教団の危機と信仰告白	北森嘉蔵	斎藤昭夫 長山信夫 大木英夫 芳賀 力
第4回 1993年	福音理解の一致を目指して —日本基督教団の危機の中で—	松永希久夫	松井敏郎 倉松 功
第5回 1994年	日本基督教団の崩壊はどこまで進むか —聖餐の乱れと教職の問題—	赤木善光 山口隆康	森 彬 廣田 登 原田史郎
第6回 1995年	伝道する教会の再生	内藤留幸 棚村重行	平田 久 竹澤知代志 倉橋康夫
第7回 1996年	教団は何処へいくのか —教会の本質と戦い—	大木英夫	張田 眞 野村和正 釜土達雄 山口隆康
第8回 1997年	信仰告白 —伝道と教団再建の基盤として—	松永希久夫	吉田 弘 小堀康彦 春原鈴子

主題等一覧(1)

パネルディス カッション	特別講演 (講演者)	礼 拝 (説教者)	第二部公開講演会
パネラー 鷺山林蔵 池宮 仰 楢本信篤		開会： 竹森満佐一 閉会： 左近 淑	
パネラー 斎藤昭夫 高橋泰二 山口隆康 橋爪忠夫 佐々木美知夫		開会： 佐藤敏夫 閉会： 松永希久夫	
全体会 講演者(主題・特別) 発題講演者 全体会司会者	神山繁實	開会： 松永希久夫 閉会： 市川恭二	日本基督教団の危機と信仰告白 講演：松永希久夫 説教：鶴飼 勇
全体会 同上	山北宣久	開会： 熊澤義宣 閉会： 高橋泰二	命の源を掘る —日本における福音の前進— 講演：佐藤敏夫 説教：伊藤瑞男
全体会 同上	長山信夫	開会： 大木英夫 閉会： 山本菊子	臨在の主，仕える教会 講演：加藤常昭 説教：春原鈴子
全体会 同上	芳澤弘和	開会： 嶋田順好 閉会： 芦名弘道	神の民の光栄ある使命 講演：熊澤義宣 説教：稲垣徳子
全体会 同上	伊藤瑞男	開会： 松永希久夫 閉会： 北島敏之	教団は何処へ行くのか —教会の本質と戦い— 講演：近藤勝彦 説教：浅原真砂
全体会 同上	橋爪忠夫	開会： 小島誠志 閉会： 井ノ川勝	信仰告白 —伝道と教団再建の基盤として— 講演：山口隆康 説教：山北宣久

日本伝道協議会

回／年	主 題	主題講演 (講演者)	発題講演 (発題者)
第9回 1998年	信仰告白と伝道 －教団再建を目指して－	近藤勝彦 芳賀 力	小泉富子 松島敬三 福島純雄
第10回 1999年	伝道と教会 －教団・教区の現状と新世紀への歩み－	大住雄一	北 紀吉 佐々木美知夫 森里信生
第11回 2000年	日本基督教団の信仰の基準 －聖書と信仰告白－	山内 眞	石黒悦雄 秋山 徹 高橋 潤
第12回 2001年	21世紀の教団の形成と伝道	小島誠志	東野尚志 小宮山剛 山内 眞
第13回 2002年	伝道－21世紀の教団の使命－	関川泰寛	パネラー 内藤留幸 小林 眞 高橋 潤
第14回 2003年	伝道－合同教会としての教団の形成－	山北宣久	長山信夫 倉橋康夫 棚村重行

主題等一覧(2)

パネルディス カッション	特別講演 (講演者)	礼 拝 (説教者)	第二部公開講演会
全体会 講演者(主題・特別) 発題講演者 全体会司会者	小林 眞	開会： 斎藤昭夫 閉会： 森里信生	信仰告白と伝道 －教団再建を目指して－ 講演：山内 眞 説教：小島誠志
全体会 同上	朴 憲郁	開会： 清水窈子 閉会： 楢本 睦	伝道する福音主義的公同教会へ飛躍を －教団の21世紀への展望－ 講演：棚村重行 説教：伊藤瑞男
全体会 同上	石井道夫 内藤留幸 松永希久夫	開会： 高山清明 閉会： 田邊由紀夫	聖書と信仰告白 －正典成立史をふりかえりつつ－ 講演：関川泰寛 説教：竹前 昇
全体会 同上	近藤勝彦	開会： 野村和正 閉会： 小池磨理子	伝道こそ教団の指命 －伝道に燃える群れの形成をめざして－ 講演：山北宣久 説教：棟居 勇
全体会 同上	佐々木美知夫	開会： 山内 眞 閉会： 内田 汎	共同体を再建しなさい 講演：芳賀 力 説教：松永希久夫
全体会 同上	T. J. ヘイスティングス	開会： 松井 睦 閉会： 尾崎マリ子	伝道－私たちの「日本基督教団〇〇 教会」は、どのような教会か－ 講演：山口隆康 説教：山内 眞